

自然との共生をめざした自然再生の取組み

○荒川茂樹・中村忠宏・金井次男（東京電力㈱）・櫻井良樹（㈱当間高原リゾート）・
水越利春（東電環境エンジニアリング㈱）・村岡政行（東電設計㈱）

近年における人間の過度な開発行為による生物の生育・生息空間の減少や生活様式等の変化による里地里山等の環境の変化により、人間の生存と生活の基盤である生態系が衰弱しつつある中、「新・生物多様性国家戦略」、「自然再生推進法」が成立し、生物多様性の保全と持続的な利用のために、政府はもとより、地方公共団体、事業者、国民などが共通の認識の下に、互いの連携、協力を密にして行動することが求められている。

ここでは、専門学識者の指導のもと、里地里山でよくみられた棚田の復元や NPO、NGO との協調により実施している自然環境の保全・創出の取組み事例について紹介する。

棚田生態系の復元をめざして（あてまバードサンクチュアリ）

当間高原リゾート（新潟県十日町市）に、約 5 万㎡の多様な水辺環境の創出を目指して合計 18 の池で構成された「あてまバードサンクチュアリ」を整備した。

当該地点は、従来、棚田と畑で構成された里山の環境であったが、リゾート開業後、一面のヨシ原で覆われた単調な環境となっていた。当間高原リゾートでは「自然とリゾートとの共生」を目指し、棚田の形状を活かし、水深・形状に変化のある多様な水辺環境の整備やカワセミの営巣用としての崖の整備、人工浮島を設置するなど動植物の好適な生育・生息環境を創出した。現在では、カワセミやカイツブリなどの営巣も確認している。

また、創出した水辺環境にどのような動植物が生育・生息していくのかをモニタリングするとともに、周辺に生息するフクロウ等動物の生態研究及びリゾート宿泊者や地元小学生等を対象とした自然観察・環境教育活動も実施している。今後、モニタリング結果をもとに科学的な評価を加え、この成果を発電所等のビオトープ整備などに反映していきたいと考えている。

水鳥が営巣する人工浮島

小諸発電所第一調整池（長野県佐久市）、約 7 万㎡の水面に設置した 3ヶ所の人工浮島は、最盛期の冬には 30 種を越える鳥でにぎわっており、日本野鳥の会（軽井沢支部）が定期的に探鳥会を実施している。この人工浮島は、ヤシ繊維の植栽基盤に発泡スチロールで浮力を持たせたユニットや古電柱などで作られている。

調査結果によれば、サギ・カモ類など 138 種、最大 3,000 羽以上が飛来し、この地域では比較的珍しいマガンやヒシクイといった飛来も確認されている。また、子育てに安全な場所と認識され、アオサギやカワウなどの営巣も確認されている。

オオタカの人工巣

2001年5月、送電線の建替工事を予定している場所の近くでオオタカの巣が確認された。

工事による繁殖の阻害を回避するため、日本野鳥の会（群馬県支部）や専門家などの意見を参考に保全対策の検討を進めた。鉄塔位置の移動・工程調整など設備面での対策も含めて検討した結果、「巣を工事箇所から極力離れた場所へ誘導」する試みに挑戦した。

事前調査により把握された営巣中心域内に含まれる樹林内で、鉄塔から極力離れた場所に、オオタカの営巣に適したアカマツの大木を選定し、その幹にパイプ2本と枝を組合わせた人工巣を設置した。

人工巣は2002年に3ヶ所に設置し、2002～2004年に毎年異なる人工巣が繁殖に利用された。2003年は途中で繁殖に失敗したが、2002年には2個体の幼鳥の巣立ちが確認され、2004年は6月現在2個体が育雛中である。